

2025（令和 7）年度
卒業時アンケート結果報告書

2026（令和 8）年 6 月
内部質保証推進委員会
IR 推進室

2025（令和7）年度 卒業生アンケート結果報告書

内部質保証推進委員会
IR 推進室

I. 実施年月日

看護学科 2025 年 12 月 6 日

栄養学科 2025 年 11 月 17 日～12 月 4 日

II. 回収方法

URL を提示し、Microsoft の Forms でオンライン回答。Forms の設問の工夫により、今年度は他学科卒業生に対する設問に間違えて回答することがないようにした。

III. 回答数および回答率

看護学科（人） 87/95（91.6%）

栄養学科（人） 38/54（70.4%）

全体 125/149（83.9%）

IV. アンケート結果の総括（アンケート結果のグラフは別冊の一覧を参照願います）

1. 在学中に身についた能力（設問 1）

本項目は、本学の DP（ディプロマ・ポリシー）に関する内容である。今年度の設問は昨年度までからさらに DP に対応したものに変更した。

両学部ともほとんどの設問に対して 97%以上が「身についた」または「ある程度身についた」という回答となった。

【看護学科】特に『看護職として、人々の生命や権利を尊重する態度』、『看護職として、人々の最善の利益や価値観を尊重する態度』、『他者と連携・協働して物事に取り組む姿勢』で「身についた」と回答した率が高かった。これは DP のうち『生命を大切にし、人々の権利を尊重する態度』および『目的を達成するために他者と連携・協働する能力』に対応する。

その一方で、「あまり身につかなかった」という回答が『他者と良好な関係を構築するためのコミュニケーション能力』、『看護職の在り方を探求する姿勢』、『看護職として、保健・医療・福祉の発展と地域社会に貢献する姿勢』で 3 名から得られた。これらは DP のうち『人々との関係性を構築する能力』および『看護を探究し、保健・医療・福祉の発展に寄与する能力』に対応している。卒業後の人間関係や、さらなる探求に不安のある学生がいたことを示している。

【栄養学科】いずれの設問に対しても一様な回答が得られた。その中でも『多様な文化や社会への理解』、『栄養専門職として、目の前にある問題解決のための立案および実践能力』、『栄養専門職として、関連分野の知識や技能を習得する能力』、『栄養専門職として、保健・医療・福祉の発展と地域社会に貢献する姿勢』の 4 項目で「ある程度身についた」という回答が多めであった。これらは DP のうち

『目的を達成するために他者と連携・協働する能力』、『問題・課題を発見し、解決する能力』、『修得した知識・技能を活用し栄養管理を行う実践力』、『栄養管理の在り方を探求し、保健・医療・福祉の発展に寄与する能力』に対応する。

また『他者と良好な関係を構築するためのコミュニケーション能力』と『栄養専門職として、必要な情報を収集する能力』で「あまり身についていない」という回答が1名ずついた（同一の卒業生）。ただしこの学生は、設問5の『大学での学習』については、学習に対しては熱心に取り組んでいると自己評価しており、設問6以降の大学に対する満足度は特記すべきものは見られない。

2. 本学のカリキュラムに対する満足度（設問2～4）

本学のカリキュラムについては、『基礎教育科目』『専門基礎科目』『専門科目（臨地実習以外）』『臨地実習科目』に関しては、「満足している」「どちらかと言えば満足している」と回答した学生が85%以上であり、昨年度の95%と比較して、若干満足度が下がった。学科別にみると、栄養学科で『基礎教育科目』『専門基礎科目』『臨地実習科目』に対して「満足していない」という回答が1名ずついるが、いずれも同一の卒業生である。この学生は、設問5の『大学での学習』や大学行事などに対しても『熱心ではなかった』という回答をしている反面、『アルバイト』に対しては『熱心に取り組んだ』と回答しており、学生生活全般に満足感を得られなかったと推察される。

また、『他学科との合同科目』については、32%の学生が「不満」「どちらかと言えば不満」と回答した。過去の報告では一昨年度は16%、昨年度は22%であり、不満を感じていた学生が多い事が推察される。今後は、合同科目の学習内容や授業展開の方法等についての課題を明らかにし、改善していく必要がある。

『保健師科目』および『栄養学科教職科目』に関する質問では、履修した学生のうち、ほとんどが『満足している』、『どちらかと言えば満足している』の回答であった。栄養学科教職課程履修者のうち「どちらかと言えば満足していない」と回答した1名は、他の設問に関しては比較的肯定的な回答をしており、何らかの不満があったものと考えられるものの、自由記載には回答がなく、現時点でこれ以上の掘り下げは困難である。

3. 在学中に熱心に取り組んだものについて（設問5）

大学での学習への取り組みに関する質問に対して、「熱心に取り組んだ」「ある程度熱心に取り組んだ」の割合は90%を超えており、昨年度の81%よりも上昇した。学習に熱心に取り組んできたことがうかがわれる。大学での行事への取り組みに関する質問では、「熱心に取り組んだ」「ある程度熱心に取り組んだ」と回答した者は学年の38%であり昨年の30%よりは上昇したものの、依然として低迷した結果となった。学科別では、看護学科が30%、栄養学科が58%であり、昨年度同様の学科による差が見られた。また、大学でのサークル活動、部活動への取り組みに関する質問では「熱心に取り組んだ」「ある程度熱心に取り組んだ」と回答した者は38%で、昨年度の19%から倍増したものの、看護学科では26%、栄養学科では60%と学科による差が認められた。

アルバイトへの取り組みに関する質問に対し、学年で84%が「熱心に取り組んだ」「ある程度熱心に取り組んだ」と回答し、学科による差はほぼ認められなかった。この傾向は昨年度とほぼ同じである。

社会活動への取り組みに関する質問に対しては、「熱心に取り組んだ」「ある程度熱心に取り組んだ」と回答した者は学年の 49%を占め、これも昨年度から倍増に近い結果となった。学科間に大きな違いは見られず、昨年度の看護学科の回答が 20%であったことから、看護学科学生の社会活動への取り組みの増加が顕著であったと考えられる。このように社会活動に熱心に取り組んだ経験のある学生については、本学が標榜する『社会的態度と行動』『人間の尊厳や多様な価値観を尊重できる能力』『社会的諸課題を多角的に捉える能力』などの資質能力の涵養につながっていると考えることができる。

4. 本学での学習支援や学生生活支援に対する満足度（設問 6）

本学における『学生に対する大学の支援（学務課、各種支援）』について、「満足している」「どちらかといえば満足している」と回答した学生の割合は 74%であり、看護学科に比べ、栄養学科の学生の満足度が高い傾向にあった。

『修学、学生、キャリア支援等の各種支援は学生一人ひとりに応じたものだったか。』について、「満足している」「どちらかといえば満足している」と回答した学生の割合は 86%であり、学科間で大きな差は見られなかった。

『本学の支援体制は、学生がお互いを支え合うことができるように整えられていたか。』について、「満足している」「どちらかといえば満足している」と回答した学生の割合は 77%であり、看護学科の学生の満足度が栄養学科の学生に比べ、高い傾向にあった。

『学習に対する意欲を高め、円滑かつ安心して学ぶことができる環境だったか。』について、「満足している」「どちらかといえば満足している」と回答した学生の割合は 82%であり、学科間で大きな差は見られなかった。

5. 本学における制度や設備、支援体制に対する満足度（設問 7）

11 項目の設問を設けたが、昨年と同様に『図書館』が 99%、『実習室の設備』95%が肯定的な回答であり、学修の物的リソースに関して高い評価を得た。また、『学年担当教員制度』、『健康管理やメンタルヘルスに関する支援』の満足度がともに 95%と高く、『ハラスメント防止対策』、『奨学金制度、経済的な相談体制』に対しては、一部に「どちらかといえば満足していない」という回答があったものの、肯定的な回答が 80%を超え、学生に対する個別支援において高い満足度が示された。さらに、『ICT 環境』に対しての満足度は 73%と前年度の 84%から、やや下降の結果となった。

『情報提供の方法（Teams・Campus Plan・掲示板）』に関して、「満足している」「どちらかといえば満足している」と回答した学生の割合は、学年全体で 60%となり、一昨年度の 77%、昨年度の 71%と低下傾向が続いた。昨年度の報告書でも指摘されたが、複数の情報提供方法があることで確認が煩雑になっていることが推察される。現在進んでいる情報提供の整理がどのように評価されるかが注目される。

6. 本学の「弱み」について（設問 8）

本設問は複数回答で回答を求めた。回答総数は 387 であった。対して、次項の「強み」の回答数は 288 であり、昨年度、一昨年度と同様に「弱み」の回答数が多い結果となった。

回答中最も「弱み」として回答された項目は『立地』（106 人）であった。回答者数が 125 人であ

ることから、全回答者中 85%がこの項目を選択している。次に回答数の多かった項目は『施設・設備』であった。特に看護学科でこの項目を選択した者が多かった。前項で『図書館』、『実習室の設備』、『その他施設設備』に対する満足度は比較的高かった結果と異なる結果となった。

また『教員のサポート』、『学生同士の交流』は栄養学科で、『サークル活動』、『学生同士の交流』は、看護学科で選択した者が目立っている。

7. 本学の「強み」について（設問 9）

本設問は複数回答で回答を求めた。回答総数は 288 であった。

回答中最も「強み」として回答された項目は『教員との距離感』（78 人）回答者数が 125 人であり、全回答者中 62%がこの項目を選択していた。これは両学科に共通している。これに続いて、『大学の雰囲気』、『教員のサポート』、『小規模大学である』が高い評価を得た。

『教員との距離感』と『小規模大学である』は今年度新しく入れた選択肢である。『大学の雰囲気』の回答数が多かったのは過去と同様の結果であった。4 年間本学で学び、その雰囲気を強みと考えていることは大学への愛着があると言えるであろう。また、小規模大学であることが逆に強みにもなり得ることを示している。」

『教育理念』、『サークル活動』については、学科間で評価が大きく異なり、『教育理念』を選択した者が看護学科 8 人に対して栄養学科では 0 人であった。また『サークル活動』に対しては看護学科 1 人に対して栄養学科 9 人が選択している。

「弱み」で非常に多くの学生が選んだ『立地』に対して、「強み」として選択した学生が 1 名いる事も特記するべきと考える。

8. 学生生活を振り返っての自由記載について（設問 10）

本学での学生生活を振り返って、伝えたいことを自由記載させた。「楽しかったです」「とくになし」など重複は省略している。また全体として多くの記載が並んでいるが、一人で非常に多くの記載をしており、複数の項目に分けた回答もある。全体として何らかの回答をした人数は 22 名（看護学科 16 名、栄養学科 6 名）であった。

過去のアンケートに対する結果考察と同様に肯定的な回答が得られた反面、学生支援バスの問題、演習室に対する不満など、大学としても認識している点への指摘も多くあった。これらは一朝一夕で対応が困難なものであるが、今後継続して検討していく必要がある。

【アンケートの回答と卒業時累積 GPA との相関について】

卒業時アンケートは、卒業生が本学で受けた教育等に対して持つ満足度や、現状の問題点をまとめ、今後の教育、施設等の改善に役立てるものである。しかしながら、今回のアンケート回収率は、国家試験合格者のうち、看護学科では 94%、栄養学科では 81%であるのに対し、国家試験不合格者では看護学科 40%、栄養学科 64%にとどまっている。これは解析結果に対する考察の困難さを増している。

本報告では、アンケートの回答と卒業時累積 GPA との相関をまとめ、報告する。アンケートの回答は順位データであるため相関はノン・パラメトリックな Spearman's ρ を利用して算出した。

★看護学科

看護学科においては統計学的に有意な相関が見られたものはなかった。しかしながら「在学中に身についた能力」（設問 1）のうち、『他者と良好な関係を構築するためのコミュニケーション能力』と卒業時累積 GPA において弱い負の相関（ $\rho: -0.195$ ）が見られた。これは DP のうち『人々との関係性を構築する能力』に対応する。この結果は学力の高い学生ほど、自己に対して厳しい目を持っている可能性は考えられるが、現時点では憶測の域を出ない。

★栄養学科

一方、栄養学科では、いくつかの設問に対する回答と、卒業時累積 GPA との間に相関が認められた。以下に、卒業時累積 GPA と相関が見られたものの一覧を表として示す。いずれも正の相関である。

設問 1：在学中に身についた能力。以下の設問において、卒業時累積 GPA と相関が認められた。

問	DP	相関係数 ρ	p 値
栄養専門職として、関連分野の知識や技能を習得する能力	DP6：修得した知識・技術を活用し栄養管理を行う実践力	$\rho: 0.351$	$p < 0.05$
栄養専門職の在り方を探求する姿勢	DP7：栄養管理の在り方を探求し、保健・医療・福祉の発展に寄与する能力	$\rho: 0.408$	$p < 0.05$
栄養専門職として、保健・医療・福祉の発展と地域社会に貢献する姿勢		$\rho: 0.344$	$p < 0.05$

設問 2～4：本学のカリキュラムに対する満足度。以下の設問において、卒業時累積 GPA と相関が認められた。

問	相関係数 ρ	p 値
臨地実習科目	$\rho: 0.343$	$p < 0.05$

設問 5「在学中に熱心に取り組んだものについて」および設問 6「本学での学習支援や学生生活支援に対する満足度」においては、相関が統計学的に認められるものは見られなかった。

設問 7：本学における制度や設備、支援体制に対する満足度。以下の設問において、卒業時累積 GPA と相関が認められた。

問	相関係数 ρ	p 値
学年担当教員制度	$\rho : 0.505$	$p < 0.005$
ハラスメント防止対策	$\rho : 0.402$	$p < 0.05$
その他施設設備	$\rho : 0.457$	$p < 0.01$
国家試験対策	$\rho : 0.384$	$p < 0.05$
就職支援	$\rho : 0.386$	$p < 0.05$

★まとめ

看護学科では卒業時累積 GPA とアンケートの結果との間に明確な相関は認められなかったが、栄養学科では、いくつかの設問において相関が認められた。学科間でこのような結果に違いが生じた原因については、さらなる考察、今後の継続的な調査、解析が必要であるが、学生の意識に何らかの差があることは明らかである。

【1年前期と卒業時 GPA との相関および国家試験合否について】

1年次の GPA と卒業時累積 GPA とでは強い相関が見られ、国家試験の合否にも大きく関与していることが明らかになった。一般に入学時の成績は学年が進むに従って、相関が弱くなることが知られているが、本学の場合 1年前期 GPA と卒業時累積 GPA との相関が高い。以下にその解析結果を示す（ただし卒業時 GPA には 1年前期の成績も含めての算出のため、解釈に注意が必要である）。

★看護学科

図 1 は、看護学科 2025 年度卒業生 1年前期の GPA と卒業時累積 GPA との散布図である。非常に強い相関が見られる。また国家試験不合格者はすでに中央値から下のグループにいることがわかる。

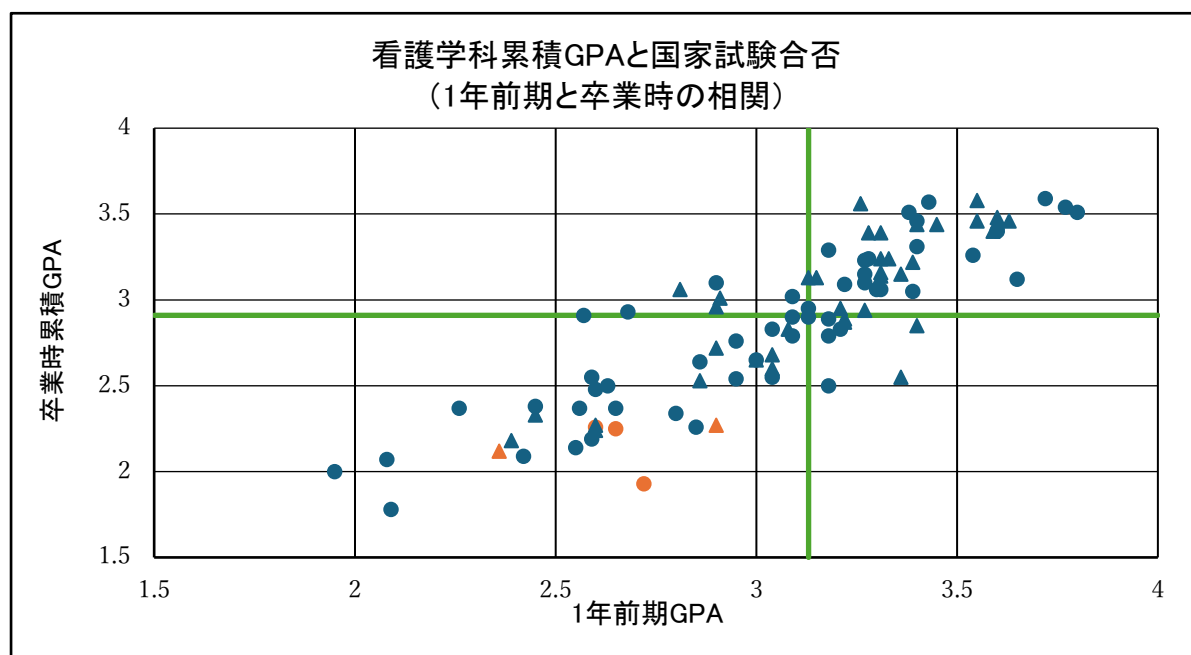


図 1：看護学科 1年前期 GPA と卒業時累積 GPA の相関

対象：2025 年度卒業生看護学科 95 名、相関係数は Spearman's ρ を使い、GPA 平均値の比較は Mann-Whitney の U 検定を用いた。

○：年内入試（学校推薦型、総合型）入学者、△：一般入試（一般選抜、共通テスト利用）入学者

青：国家試験合格者、オレンジ：不合格者。緑のライン：GPA の中央値（GPA の中央値は 1年前期：

3.13、卒業時 2.91）全データの相関係数 0.876

1年前期終了時 GPA で 2.7 あたりにギャップが見られる。

看護学科における 1年前期 GPA の平均値（±標準偏差）は、年内入試入学者 3.00 ± 0.44 に対して一般入試入学者 3.15 ± 0.34 であった。卒業時 GPA の平均値は年内入試入学者 2.79 ± 0.47 に対して一般入試入学者 2.97 ± 0.43 であった。いずれも一般入試入学者の成績が高い傾向があるが、統計学的な有意差は認められなかった。

一方、国家試験合格者の 1年前期 GPA の平均値（±標準偏差）は 3.08 ± 0.40 、に対して、不合格者 2.65 ± 0.20 であった。卒業時累積 GPA 平均値は国家試験合格者 2.91 ± 0.44 に対して不合格者 2.17 ± 0.15 であった。いずれも明らかな差が認められた。（1年前期： $p < 0.05$ 、卒業時： $p < 0.005$ ）

★栄養学科

図2は栄養学科2025年度卒業生の1年前期GPAと卒業時累積GPAとの散布図である。1年前期では中央値ギリギリまたはそれよりも低いグループからも、その後の努力のためか、国家試験合格者が3名いる。

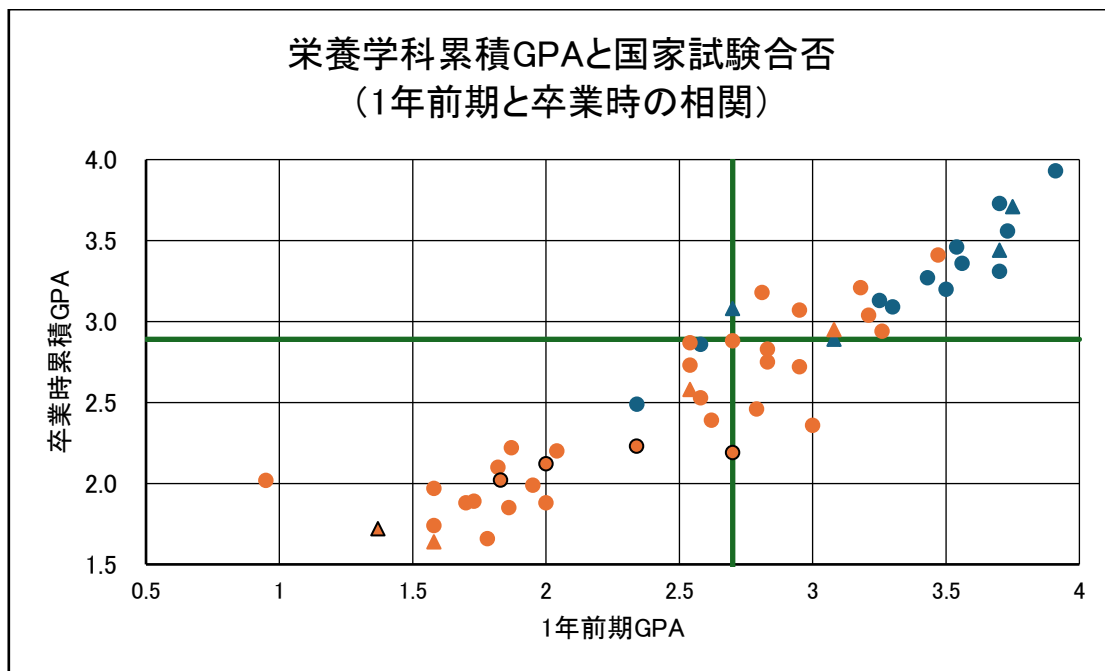


図2：栄養学科1年前期GPAと卒業時累積GPAの相関

対象：2025年度卒業生栄養学科54名中、編入生2名をのぞく52名、解析方法は看護学科と同じ。

○：年内入試（学校推薦型、総合型）入学者、△：一般入試（一般選抜、共通テスト利用）入学者

青：国家試験合格者、オレンジ：不合格者。黒枠は未受験者。緑のライン：GPAの中央値（GPAの中央値は1年前期：2.70、卒業時2.89）。全データの相関係数0.937

看護学科よりも1年前期GPA2.2あたりに見られるギャップが明瞭である。学修意欲が2グループに分かれている可能性が示唆される。

栄養学科における1年前期GPAの平均値（±標準偏差）は、年内入試入学者 2.65 ± 0.73 に対して一般入試入学者 2.73 ± 0.88 であった。卒業時GPAの平均値は年内入試入学者 2.65 ± 0.60 に対して一般入試入学者 2.72 ± 0.88 であった。いずれも有意差は認められなかった。

一方、国家試験合格者の1年前期GPAの平均値（±標準偏差）は 3.36 ± 0.46 、に対して、不合格者 2.36 ± 0.63 であった。卒業時累積GPA平均値は国家試験合格者 3.28 ± 0.37 に対して不合格者 2.40 ± 0.61 であった。いずれも明らかな差が認められた。（ $p < 0.001$ ）

★まとめ

以上の結果から、本学の学生の特性として1年前期に学修につまずいた者は、高い確率で卒業までの傾向を引きずり、国家試験の合否にまで影響している事が明らかとなった。早期からフォローアップを行う事の重要性が示唆される。一方で、1年前期では成績が振るわなかった学生であっても国家試験に合格している者も少数ではあるが存在する。学生の「やる気」をいかに引き出すかが課題であろう。